高　等　学　校

平成２７年度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 …… 1

Ⅱ　研　究　の　視　点 …… 1

Ⅲ　研　究　の　仮　説 …… 2

Ⅳ　研　究　の　方　法 …… 2

Ⅴ　研究の内容（結果） …… 4

Ⅵ　研究の成果（知見） …… 7

Ⅶ　今　後　の　課　題 …… 21

Ⅷ　付　録　（　資　料　） …… 22

研究主題	「思考力」、「基礎力」、「実践力」を育むための ホームルーム活動における指導の在り方 ～文化祭における一人一人の活躍の場を追って～

Ⅰ　研究主題設定の理由

平成21年３月に公示された高等学校学習指導要領では、第５章「特別活動」第１「目標」で、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」と示している。この目標は、ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事の三つの内容を総括する目標であり、特に、「自主的、実践的な態度」、「望ましい人間関係」は全ての特別活動において共通である。

ＰＩＳＡ調査（2012）によると、「生徒の学校への帰属感」に関する質問項目において、日本は2003年よりも肯定的な回答の割合が増えている（ＰＩＳＡ2012　６章６．１．５）。また、高校２年生を対象とした「都立高校生意識調査」（東京都教育委員会　平成23年）によると、都立高校生は「自分の個性を伸ばすことができる」や「自分のやりたいことができる」との理由で学校を選択しており、学校に対して高い期待をもって入学していることが分かる。

しかし一方では、「高校生の生活と意識に関する調査報告書－日本・米国・中国・韓国の比較－」（国立青少年教育振興機構　平成27年8月）において、自尊感情に関する項目では低い数値を示している。「自分はだめな人間だと思うことがある」という項目の数値は72.5%（中国56.4%、アメリカ45.1%、韓国35.2%）である。

また、本部会の部員が所属する学校の生徒の様子に関して、学校に対する期待感や帰属感が必ずしも高くないことが指摘された。校種や生徒の違いはあるが、上手にコミュニケーションが取れず、個性や能力を生かして自主的、協働的に活動できる生徒が少ないことも課題として挙げられた。

今年度の教育研究員の全体テーマである「思考力・判断力・表現力等を高めるための授業改善」と高校部会のテーマである「『思考力』、『基礎力』、『実践力』を育むための、主体的・協働的な学習の指導の在り方」を踏まえ、特別活動の中で生徒が他者と協働する場面の多い文化祭を取り上げた。生徒が他者と協働することによって、思考力・基礎力・実践力を向上させ、自己肯定感・自己有用感を高め、生徒同士が互いの活躍を認め合うことで、集団（学級や学校）への帰属感が向上し、望ましい人間関係の形成につながると考え、研究主題を「『思考力』、『基礎力』、『実践力』を育むためのホームルーム活動における指導の在り方～文化祭における一人一人の活躍の場を追って～」と設定した。

Ⅱ　研究の視点

１　現状

生徒を指導している過程で、自らの長所や短所を理解して行動すること（自己理解）及び

自分の思ったことや感じたことを他者とコミュニケーションすること（自己表現）が不十分であり、所属する集団（特にホームルーム）の中で、自己の個性や能力を発揮しきれていない様子が見られる。また、生徒が他者と協働的に活動する場面において、自ら望ましい人間関係を形成しようとする力が弱い傾向にある。

２　課題

このような状況の中で、集団で協働するためには、自己の個性や能力を自覚し、他者の承認を得て、自己肯定感・自己有用感を高める必要がある。また、自らの役割を自覚して行動することによって、他者と協働する機会をもつ必要がある。

以上の現状と課題を踏まえ、集団での活動や、他者と協働する活動が多い場面における自主的・協働的な活動の中での生徒の意識の変化（自己理解や他者の活動の受容・承認・帰属意識）を追うことを研究の視点とした。

Ⅲ　研究の仮説

上記の研究の視点を踏まえ、次の仮説を設定する。

【仮説】

生徒が自己の個性や能力（長所・短所）を認識することで、ホームルームでの自己の役割を自覚できるようになる。その役割で他者と協働し、他者に承認されることで、自己肯定感・自己有用感が高まり、自己を表現する力が向上し、主体的に活動することができるようになる。

Ⅳ　研究の方法

自己理解が不十分であることから集団の中で自己の能力を発揮しきれていないことや、自ら望ましい人間関係を形成しようとする力が弱いと考えられることから、他者と協働する活動の場面が多い文化祭を取り上げ、生徒の意識の変容に着目し、仮説の検証に取り組む。

１　研究対象校と対象学年（人数）

(1)　Ａ高等学校・・・全日制、普通科、単位制、１年次生（240 名）

(2)　Ｂ高等学校・・・定時制（三部制）、総合学科、単位制、１年次生（153 名）

(3)　Ｃ高等学校・・・定時制（三部制）、普通科、単位制、１年次生（307 名）

(4)　Ｄ高等学校・・・全日制、普通科、中高一貫教育校、１年生（200 名）

２　研究（検証・指導）方法

生徒の変容を文化祭の前と後で比較し、教師の指導・助言が影響するのかを検証するために、以下の手順で研究を行う。

(1)　事前ワークシート(22 ページ参照)

ア　目　　的:自己の個性や能力を認識し、文化祭のクラスの企画で自己の役割を自覚する。

イ　調査項目：自己の長所・短所、クラスへの帰属意識や承認されているという実感等

(2)　グループワーク：「振り返りグラフ」の作成(23ページ参照)

ア　目　　的：活動中の出来事を振り返り、互いの活躍を認め合い、自己肯定感を高める。

イ　調査項目：文化祭の準備活動の振り返り、他者の活動の受容・承認等

(3)　事後ワークシート(22ページ参照)

ア　目　　的：文化祭を通して自己や他者との関わりに変化があったかを見つめ直す。

イ　調査項目：文化祭での役割の達成、やる気になったきっかけ、クラスへの帰属意識等

(4)　教師アンケート(24ページ参照)

ア　目　　的：ホームルーム活動における教師の指導・助言が影響を与えているか測る。

イ　調査項目：活動前・中・後の指導・助言の時期とその方法

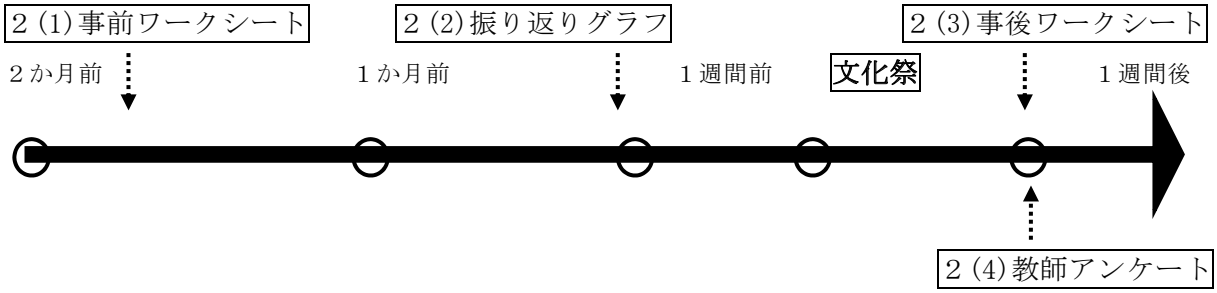
事前・事後ワークシートは、各ホームルームで実施する質問紙による自計式調査である。質問紙の構成は、生徒の意識の変化を客観的に測れるように量的調査に基づく部分と、言語表現の変化を測れるように構成した質的調査に基づく部分に分ける。なお、生徒の意識の変化を追えるように、組・出席番号を記入させる。

量的調査に基づく部分では、事前・事後ワークシートの数値で、生徒の帰属意識や承認されている実感の変化等を比較する。検証には、統計的手法を用いた検定を行い、指導前と指導後の変化に有意な差があるかを判定する。

一方、質的調査に基づく部分では、事前・事後ワークシートの記述を基にテキストマイニング(自然言語処理に基づくデータ解析手法)を行い、生徒が回答した表現がどのように変化したのかを検証する。検証では、使用されている語句を単語単位で付箋に書き、４領域に分類する方法及びパソコンソフトを用いて、教師の指導・助言と生徒の意識の変化の関係性を明らかにする。４領域に分類する方法については、長所・短所を、「人との関わりに関すること」を横軸（自分・他者）に、「個人の能力や資質に関すること」を縦軸（能力・性格性質）にとり、４領域に分類する。その中から、特徴のある生徒の回答を抽出し、その生徒の事後ワークシートの結果と比較し、考察する。そして、本研究では、ホームルーム担任に教師アンケートを実施し、ホームルームにおける教師の指導・助言がどのように生徒に影響を与えているかを分析することで指導の在り方を研究する。

３　研究の計画（時期）

上記ワークシートの各校における実施時期は、以下を目安とする。



Ⅴ　研究の内容（結果）

1　研究構想図

全体テーマ　**思考力・判断力・表現力等を高めるための授業改善**

高校部会テーマ　**「思考力」、「基礎力」、「実践力」を育むための、主体的・協働的な学習の指導の在り方**

各教科等における「思考力」、「基礎力」、「実践力」の定義

思考力　・他者との関係の中で、自らの役割に気付く力。
・集団の中で、自らの役割を果たそうとする力。

基礎力　・課題解決の方法や態度を自ら身に付けようとする力。
・望ましい人間関係を形成するためのコミュニケーション能力。

実践力　・他者と協働して課題を解決しようとする力。
・集団の中で互いに認め合い、高め合うことができる力。

各教科等における主体的・協働的な学習の現状と課題

現状

・自己理解及び自己表現が不十分であり、所属する集団の中で自己の能力等を発揮しきれていない。
・他者と協働的に活動する場面において、自ら望ましい人間関係を形成しようとする力が弱い傾向にある。

課題

・自己の個性や能力を自覚し、他者から承認されることで、自己肯定感・自己有用感を高める必要がある。
・自らの役割を自覚して行動することによって、他者と協働する機会をもつ必要がある。

特別活動 部会主題

「思考力」、「基礎力」、「実践力」を育むためのホームルーム活動における指導の在り方
～文化祭における一人一人の活躍の場を追って～

仮　説

生徒が自己の個性や能力（長所・短所）を認識することで、集団における自己の役割を自覚できるようになる。その役割を意識して他者と協働し、他者に承認されることで、自己肯定感・自己有用感が高まり、自己を表現する力が向上し、主体的に活動することができるようになる。

具体的方策

・ワークシートを通して自己を客観的に見つめさせ、果たすべき役割を意識させる。
・グループワーク（振り返りグラフの作成）を通して、互いの活躍を認め合い、より協働的な活動をさせる。

検証方法

活動前後のワークシートにおける生徒の回答を数値的に分析し、自由記述のキーワード（言語表現）の変化とホームルーム活動における指導との関連性を検証する。

２　実践事例

本研究では仮説を検証するため、一人一人の活躍の場である文化祭前後において、ワークシートを実施した。通常の特別活動における実践事例は、一単位時間を提示しているものが多いが、本研究においては、あらゆる校種の高等学校においても実践できることや、短時間（12 分程度）で取り組めることに重点を置き、ショートエクササイズを提案する。

(1)　題材名

「文化祭における一人一人の活躍の場作りと自己理解を通して、他者と協働する態度を育成するホームルーム活動」

(2)　題材の目標

・ホームルーム活動の中で、他者と協働する機会の多い文化祭において、自己理解を深め自己表現するきっかけをつくる。

・自らの役割を認識し、他者との関わりの中で役割を果たそうとする態度を育成する。

・他者から承認されることによる自己肯定感・自己有用感の高まりを実感させる。

(3)　評価規準

観点	ア　集団活動や生活への関心・意欲・態度	イ　集団や社会の一員としての思考・判断・実践	ウ　集団活動や生活についての知識・理解
評価規準	①　ホームルームや学校生活の充実と向上に関わる諸問題に関心をもち、文化祭でのホームルーム活動の中で、自らの特性を生かし役割を果たそうとしている。 ②　集団活動に積極的に参加し、課題解決の方法や態度を自ら身に付けようとしている。	①　ホームルームや学校の一員としての自己の役割と責任を自覚し、他者との関係の中で、自らの特性と役割について考え判断し、実践している。 ②　集団の中で、互いを認め合い、他者と協働して高め合っている。	①　望ましい人間関係を形成するためのコミュニケーションの取り方を理解している。 ②　文化祭の意義や活動の方法などについて理解している。

(4)　指導の計画

時間	学習内容	学習活動	評価規準 （評価方法）
第一次 （事前）	ホームルーム企画における自身の役割を考える。	・事前ワークシートで自身の長所・短所を考える。 ・自己の特性を生かして自身の果たす役割を宣言する。	・ア① ・イ① ・ウ① （ワークシート）
第二次 （事中）	これまでの準備活動における協働の場面について、グループ内で意見交換をする。	・役割ごとのグループで「振り返りグラフ」の作成を行う。 ・「振り返りグラフ」の特徴のある部分について、誰が何をどのように貢献をしたのか等を話し合い、書き込む。	・ア② ・イ① ・イ② ・ウ① （ワークシート・観察）
第三次 （事後）	自身が果たした役割について振り返る。	・事後ワークシートで文化祭の活動を振り返る。 ・文化祭で果たせた役割について記述する。	・ウ① ・ウ② ・イ① （ワークシート）

なお、上記の生徒の活動に対し、ホームルーム担任を中心とした教師による生徒の観察や声掛け等も研究の計画に含む。

(5)　指導の方法

ア　ホームルーム活動①

「事前ワークシートを通して、長所・短所を自覚し、自己理解を深める」

(ｱ)　本時の目標

生徒一人一人に、自身の長所・短所を自覚させ、自己理解を深めさせるとともに、文化祭における自身の役割を認識させ、宣言することで個人の目標を明確にすることができる。

(ｲ)　本時の展開（10 分）

導　入（1分）　ホームルーム担任から説明を聞き、ワークシートへの記入法を理解する。

展　開（8分）　ワークシートを配布し、個人で記入する。

※長所・短所の項目に基づいて、自分の役割についての宣言を記入するように指導する。

まとめ（1分）　ワークシートを回収する。

イ　ホームルーム活動②

「振り返りグラフの作成を通して、準備活動を振り返り、互いの活躍を認め合う」

(ｱ)　本時の目標

生徒一人一人が、準備活動において、他者の活躍を発見し、認め合うことで、自身の活躍にも目を向けることができる。ホームルームという集団における役割を生徒自身が担っているということを自覚させ、自己肯定感・自己有用感を高めることを目指す。

(ｲ)　本時の展開（12 分程度）

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準 （評価方法）
導入 （1分）	【事前説明】 ・ワークシートへの取り組み方を理解する。 【役割ごとのグループ作り】 ・５名程度のグループに分かれ着席する。	・グラフの用紙と記入例を必要数準備する。 ・１グループあたりの人数が多い場合は分割させる。	・ア②
展開 （8分）	【グループワーク】 ・ワークシートの配布後、役割ごとのグループで準備活動を振り返り、自身や他者の活躍について話し合う。 【「振り返りグラフ」の作成】 ・時間を横軸に、準備期間に起こった出来事を縦軸とする。記入例を参考に、各グループで基準を設定し、ワークシートに線を書き入れる。 ・グループ全員の活躍の場面を振り返り、書き入れた線の近くに個人名と活躍の内容を書く。 ・他者の活躍を発見することにより、自身の活躍にも目を向ける。	・全員が発言できるよう促す。 ・横軸（時間軸）の起点は生徒に決めさせる。 （例：企画が決まった時、文化祭１か月前等） ・「振り返りグラフ」には全員の活躍の場面と名前を記入するよう机間指導を行う。	・イ① ・イ② ・ウ① （ワークシート・観察）
まとめ （3分）	【ワークシートの回収・共有】 ・他のグループの「振り返りグラフ」を見る。	・回収したワークシートから数枚選び、紹介する。	・ア②

ウ　ホームルーム活動③

「事後ワークシートを通して、自身の役割を振り返り、他者と協働する大切さを実感する」

(ｱ)　本時の目標

事前ワークシートに記述した自身の長所・短所を再認識させ、文化祭のホームルーム活動において役割を果たせたことや、新たに挑戦したことについて記入する。この活動を通して、自身が役割を担うことや他者と協働することの大切さを実感することができる。

(ｲ)　本時の展開（10 分）

導　入（1分）ホームルーム担任からの説明を聞き、ワークシートへの記入法を理解する。

展　開（8分）ワークシートの配布後、個人で記入する。

まとめ（1分）ワークシートを回収する。

Ⅵ　研究の成果（知見）

１　分析の観点

(1)　単純集計

本研究では、各ワークシートの量的調査項目の回答を各校ごとに単純集計し、比較した。回答数は、事前ワークシート・事後ワークシートの順に、Ａ校（237 名・236 名）、Ｂ校（117 名・110 名）、Ｃ校（237 名・245 名）、Ｄ校（230 名・306 名）である。

なお、事前ワークシートの質問項目を bq（before questions の略）、事後ワークシートの質問項目を aq（after questions の略）と表記し、bq、aq に付番する番号は、各ワークシートの量的調査項目とした。例えば、bq1 の場合、事前ワークシートの量的調査項目の１番目の質問を意味する。また、質的調査項目については、bqs（before questions script の略）、aqs（after questions script の略）と表記し、bqs、aqs に付番する番号は、各ワークシートの質的調査項目とした。例えば、aqs4 の場合、事後ワークシートの質的調査項目４の質問を意味する。

事前・事後のワークシートの分析（量的・質的）に際して、bq と aq で関連のある項目を以下のように分類し、項目Ａ～項目Ｊに分けた（以下、項目＊と略記する、図表１）。

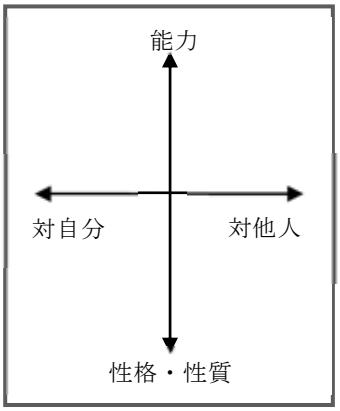
質　問　項　目（カッコ内は質問番号）
項目Ａ：ホームルーム内の協力 ・クラスは協力して活動できている。(bq3) ・クラスは協力して活動できていた。(aq1)
項目Ｂ：ホームルーム内の一員 ・このクラスの一員であるという自覚をもっている。(bq4、aq2)
項目Ｃ：ホームルーム内の承認・理解 ・このクラスは、自分の良いところ（長所）を分かってくれていると思う。(bq5、aq3)
項目Ｄ：ホームルーム内の人との協力 ・人と協力して何かを行うことが得意である。(bq6、aq4)
項目Ｅ：文化祭における成功感覚 ・文化祭をぜひ成功させたいと思っている。(bq7) ・文化祭は（クラスの出し物）は成功した。(aq7)
項目Ｆ：文化祭における自分の役割への意識 ・文化祭で自分の役割を意識して活動できた。(aq5)
項目Ｇ：文化祭におけるやる気になったきっかけ ・あなたが文化祭に対してやる気になったきっかけで一番のものは何ですか。(aqs2)
項目Ｈ：自分自身の長所と短所 ・あなたの長所と短所は何ですか。(bqs3)
項目Ｉ：長所・短所をもとにして果たせる役割 ・長所・短所を踏まえて、あなたが文化祭の役割としてクラスにできることは何ですか。(bqs4)
項目Ｊ：自分自身の長所が役割達成に与えた影響 ・「良いところ」を生かして、クラスにどのような役割を果たすことができましたか。(aqs4)

図表 1 「bq と aq の質問内容の分類」

(2) 自由記述の分析

項目Ｈについては、キーワードをポジティブな表現（桃色の付箋）とネガティブな表現（水色の付箋）に分けて４領域にプロットした（図表２）。また、各校ごとに生徒の書いた語句を分類し、分析した。

また、項目Ｈと項目Ｊについては、使用語句数の変化を分析した。なお、Ｃ高校とＤ高校については、テキスト型データを統計的に分析するためのソフトウエア[1]を使用した。項目Ｇについては、回答数の多かった選択肢を各校で抽出し、記述内容に特徴のある生徒を２名ずつ取り上げた。教師アンケートでは、生徒の中から「一番頑張った生徒」を１名抽出し、その生徒の自由記述の分析を行った。



図表 2「４領域のプロット図」

２　各校の研究結果

(1)　Ａ高校

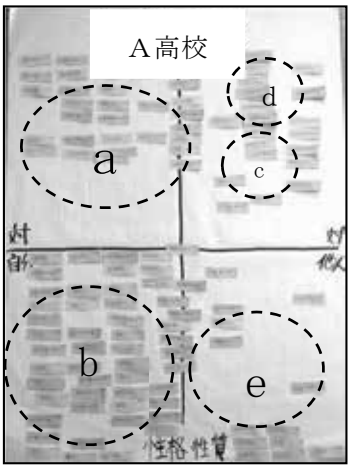
ア　単純集計

量的調査において、項目Ａに対する肯定的回答（あてはまる・ややあてはまる）の割合は、事前ワークシートの 74.9% から事後ワークシートの 85.8%へと 10.9%上昇し、最大の上昇幅となった。項目Ｂに対する肯定的回答は、89.3%から 0.7%上昇し、90.0%となった。わずかな上昇ではあるが、少なからず事後の方がホームルームに対する帰属意識が増したと言える。

次に、項目Ｇに関して、Ａ高校で最も多かった回答が「期限が迫ってきたこと」であり、次に多かった回答は「クラスの雰囲気」である。これらの回答に共通していることは、自分自身から生まれてくる能動的な力ではなく、他者又は外的要因から影響を受けている生徒が多いと捉えることができるということである。

イ　自由記述の分析

事前ワークシートにおいて、長所・短所を記述した回答には、４領域に分類した際に、対自分の能力については「絵が描ける」、「料理が好き」等、幅広い具体的な特技を肯定的に長所として挙げることができた生徒が多かった（図表３のａ部分）。一方、対自分の性格・性質に関しては、「優柔不断」、「飽きっぽい」等の否定的な短所を挙げる生徒が多かった（図表３のｂ部分）。さらに注目すべき点は、対他人の（自分の）能力については、「自分から意見を言えない」という短所を挙げる生徒がＡ高校としても最多であった（図表３のｃ部分）。また、同様に、対他人の（自分の）能力について「人と協力して行動できる」という長所を挙げていた生徒が多く見られた（図表３のｄ部分）。最後に、対他人の性格・性質についてはほとんど意見が出て



図表 3「Ａ高校の４領域のプロット図」

[1] 「計量テキスト分析」「テキストマイニング」といわれる方法で、樋口耕一　2014『社会調査のための計量テキスト分析 - 内容分析の継承と発展を目指して』株式会社ナカニシヤ出版 を参照し分析に用いた。

こなかった（図表３のｅ部分）。

これらの分類結果から分かることは、自分の意見は進んで言えないが、他者が設定した方針の中では協力して活動できるという生徒が多い傾向にあるということである。その原因として、自己理解、自己表現をする能力が十分でないために、自己肯定感・自己有用感が薄れてしまっていることが考えられる。

次に、項目Ｇにおいては、抽出した生徒の自由記述を、事前から事後にかけて言語活動の充実化を図れたかという点に着目し比較した。項目Ｇにおいて最も多かった「期限が迫ってきたこと」と回答した生徒は、事前よりも事後の方がわずかであるが記述量が増している（図表４）。また、記述における自己分析や説明もより詳細に変化していることが読み取れる。図表４中の No.1 の生徒と No.2 の生徒は長所を生かした活動ができたと振り返っていることが分かる。

教師アンケートにおいて、ホームルーム担任が抽出した「担任からみた一番頑張っていたと思う生徒」のうち１名をさらに抽出した。図表４中の No.5 の生徒は、項目Ｇにおいて「いいものを作りたい」という回答をしている。前述の４名の生徒との決定的な違いは、自らの意思で能動的に物事を考え、それを原動力にできているという点にある。

Ａ高校全体の記述についても、図表４中の No.1～4 の生徒の分析と同じ傾向であり、Ａ高校全体としては、大人数の中では自分の意見を進んで言えないが、周囲の生徒たちと協力して行動できるという、協調性を持ち合わせていることが分かる。つまり、他者と協働することに関しては高い意欲をもって実行できていると言える。

また、項目Ｈにおける単語のみの出現回数を調べると、「人」が 28 回（うち長所として 17 回、短所として 11 回）、「意見」が 27 回（うち長所として 6 回、短所として 21 回）、「自分」が 26 回（うち長所として 4 回、短所として 22 回）であった。また、これは全体のキーワード調査結果とほぼ一致する。事後ワークシートの記述項目Ｊでは、それらのキーワードを引き続き用いながらも、ポジティブな意見（「協力して行動できた。」等）を記入する生徒が大多数であった。また、「人」という単語が頻出しているということも、ポジティブにもネガティブにも人との関わりに対して関心をもっていることが分かる。

ウ　教師の指導の影響

教師アンケートによると、３日前には作業の進捗状況を把握していたという肯定的回答が 100%であった。文化祭の３日より前には進捗状況を把握していなかった（する必要がなかった）ホームルーム担任も複数名いたようであるが、「文化祭のクラスの『テーマ（出し物）』、『文化祭実行委員』、『役割分担決め』の指導・助言をしたか」の項目についても、肯定的回答が 100%であり、ホームルーム担任は積極的に生徒に関わっていることが改めて分かる。

「担任からみた一番頑張っていたと思う生徒」の項目については、文化祭実行委員・係や演劇のキャストの生徒が多かった。当該生徒の自由記述の変化を追うと、必ずしも記載する文章量が多い生徒ではないことが分かった。

ホームルーム担任はいずれも指導上の留意点として「生徒が主体的に動ける集団作り」、「全員で楽しく」、「真面目に取り組んでいる生徒が損をすることがないように」等、全員に目を行き届かせ、一人一人の活躍の場を作ろうとしていることが分かった。また、文化祭後のホ

ームルームにおいて、「集団として良い物を作るためにはどんなコツが必要か」、「集団で、一つのものを協力して作り上げていくのはとても難しいものだ」等、協力の大切さについて振り返ったという回答が全員の教師アンケートから見られた。「生徒の活動・活躍を褒めたか」については、ホームルーム全体と生徒一人一人に対しては、いずれも肯定的回答が 80%を超すが、「あてはまる」のみに限定した際は、生徒一人一人に対してとなると、20%を下回る。以上のように、方法の差はあれどもホームルーム担任が生徒に関わっていくという指導から、事後の生徒の意識が少しでも達成感をもった良い方向に向かっているということが分かった。同時に、今後の課題として、ホームルーム担任をはじめとする教師は、適切な時期に、ホームルーム全体は当然ながら、さらに生徒一人一人の活躍を常に追う努力が必要になってくるだろう。

No.	性	項目G	項目H	項目I	項目J
1	男	期限が迫ってきたこと	長所：面倒見がいい 短所：慣れるまでは、自分から話せない	クラスに慣れつつあるので、意見を言っていきたい。	私は自分から行動できるので、文化祭では計画を立てて係をまとめることができました。
2	女	期限が迫ってきたこと	長所：絵を描くことが得意 短所：自分の意見は特定の人にしか言えない、人と壁を作りやすい	絵を描くことが得意なので、裏方で小道具とか作ってます。	私は絵を描くことが得意なので、文化祭ではビラとポスターを描いた。
3	男	クラスの雰囲気	長所：明るい、フレンドリー 短所：優柔不断で物事が決められない	人の話をよく聞いて、自分もよく意見を出し協力する。	私は協力して行動できる人なので、文化祭では大道具を作るなどのサポートをすることができました。
4	女	クラスの雰囲気	長所：真面目 短所：自分の意見を言うのが苦手	私はたくさんの人の前で話すことは苦手なので、陰で支えられるように頑張ります。	私は工作や飾りつけが好きなので、文字を書いたり、外の飾りつけをしました。
5	女	ー（担任による抽出） いいものを作りたい	長所：誰とでも喋れる 短所：あまり断れない	私は文化祭実行委員なので、絶対成功させます。	私は文化祭実行委員なので、文化祭では劇を成功させるように努力しました。

図表 4「Ａ高校の自由記述の変化」

(2)　Ｂ高校

ア　単純集計

事前・事後のワークシートの比較では、項目Ａで、肯定的回答の変化は 75.9%から 78.6%とわずかに上昇であったが、項目Ｃは 63.0%から 63.2%とほぼ変化がなく、項目Ｂは 83.3%から 73.5%、項目Ｄは 66.7%から 62.4%と下降に転じている。つまり、ある項目においては、文化祭の活動が生徒個々にとっての達成感や自分の成長を感じられるものにはならなかったと分析できる。

一方、項目Ｅについては、93.5%から 86.3%となっており、事前の数値から減少してはいるが、他の項目から見ると事後ワークシートでも肯定的回答は比較的高い数値である。項目Ａの数値の上昇とともにみると、ホームルーム全体の活動としては成功であり、協力すること

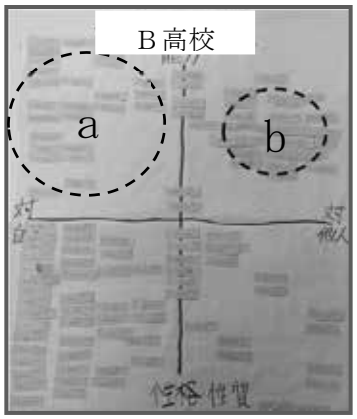
ができたと感じている生徒が多いと言える。

この、項目Ｂや項目Ｄという自己への評価は低く、ホームルーム全体への評価は高いという差は、自己の果たした役割について、生徒それぞれが自覚することができたかどうかに関係しているのではないかと考えられる。また、ホームルーム別の集計結果の数値では、事後の回答結果がいずれも他に比べ、全体的に低い数値となっていたホームルームがあった。このホームルームでは、項目Ｆへの事後の回答(aq5)の肯定的回答の数値が 44.0%と特に低かった（年次全体では 75.2%)。役割を意識できなかった生徒が多かったということが、事後の全体的な評価が低いことと連動している。

次に、項目Ｇで、最も多かった回答は「友達の協力」と答えた生徒と、「期限が迫ってきたこと」であった。それぞれの回答をした生徒の単純集計の結果は、「友達の協力」と答えた生徒は平均 83.5%、「期限が迫ってきたこと」と答えた生徒は平均 63.5%が肯定的回答をしている。明らかに「友達の協力」と答えた生徒の方が、ホームルーム及び自己への事後の評価が、肯定的回答が多いという結果になった。特に、項目Ｃについての数値が最も大きな差が出た（「友達の協力」と答えた生徒は平均 88.2%、「期限が迫ってきたこと」と答えた生徒は平均 47.1%が肯定的回答)。Ｂ高校の数値的な結果分析からは、他者と協働できたと感じることが、文化祭の経験を通じて達成感や自己肯定感を高めることに大きく影響していると捉えることができる。

イ　自由記述の分析

Ｂ高校では、事前ワークシート分析において、個人の能力に関する事柄を長所として挙げる生徒が非常に多かった（図表５のａ部分)。「絵が得意」、「計算が得意」など、自分の好きなことや得意分野を具体的に挙げ、それを生かしたいと考えている。一方、他者に対する内容で集中したのが、「人の言うことを聞ける」、「優しい」(長所)、「人前で話すのが苦手」、「自分の意見をうまく言えない」（短所）である（図表５のｂ部分)。得意なことを生かしたいと思う一方で、「人から言われればやるし協力できるという意識はあるが、自分で発信したりするのは苦手」という自分の特性を内向的だと捉える生徒が多いのが特徴である。



図表 5「Ｂ高校の４領域のプロット図」

次に、事後ワークシートにおいて、項目Ｇの中で多かったのが、「友達の協力」と「期限が迫ってきたこと」で、それぞれ全体の 15.7%であった。抽出した生徒のうち、「友達の協力」と答えた図表６中の No.1 の生徒は、項目Ｈの長所が多く書かれ、積極的であることがうかがえる。事後ワークシートでは、初めの宣言とは違うが、自分の働きについて前向きに記述している。図表６中の No.2 の生徒は、項目Ｈで、「人の話をよく聞く」が「積極的に動けない」という、他の生徒も多く挙げていた内容を書いていた。一方、事前の宣言では「なるべく積極的に動けるようになる」としていた。事後ワークシートの「友達に言われて嬉しかったこと」では「自分から作業を手伝いに行ったとき、友達からありがとうと言われました」と回答するなど、具体的に自分の行動と他者の協力が分かる体験を記述し、項目Ｊに対して肯定的回答をしている。

「期限が迫ってきたこと」と回答した図表６中のNo.３の生徒は、事後の記述から、人前に立ち、リーダーを担った生徒である。単純集計の数値は協力に関する項目Ａと項目Ｄで事前ワークシートより事後の数値が高くなり、他の項目は変化がなかった。また、ホームルーム担任の「頑張った生徒」としても挙げられている。図表６中のNo.５の生徒のように、まとめ役を担った生徒は各ホームルーム担任から「頑張った生徒」として多く挙げられていた。また、この生徒は項目Ｇにおいて、「自分の役割が決まったこと」と答えており、責任感をもって活動に臨んだことが、ホームルーム担任の目にも見えたと推測される。ただし、No.５の生徒も含め、必ずしも単純集計の結果が肯定的回答に変化する結果にはならなかった。

Ｂ高校の特徴として、協働することへの自信のなさや、経験のなさ、不慣れさが挙げられる。しかし、最終的に数値では否定的な回答を選んでいる生徒も、行事を通じて記述の内容に挑戦したこと、達成したことが書かれている。このことから、体験を他者に評価してもらい実感をもつことが、行事後の自己評価を高めることにつながってくると考えられる。

No.	性	項目Ｇ	項目Ｈ	項目Ｉ	項目Ｊ
1	男	友達の協力	長所：計算、タイピング、自分から誘える、人と接するのが得意。 短所：言葉がきつい、すぐへこむ、流されやすい、体力がない	人と関わるのが好きなので、前に出て接客などをする。	私は何にでも対応できるので、モグラたたき班でしたが、私が学校に戻ったときすでにほとんどできていたので、飾りつけをメインに手伝いました。
2	女	友達の協力	長所：人の話をよく聞く。 短所：積極的に動けない。	ちゃんと話を聞いて指示されたことをする。	私は、人の話を聞けるので、メンバーの言っていることをよく聞いて、作業に移れました。
3	男	期限が迫ってきたこと	長所:他者とコミュニケーションをとりつつサポートできる。 短所:時々ドジをしてしまい、他人に迷惑をかけてしまう。	文化祭実行委員として、指揮をとったりすることをします。	自分は人前で話せるので、文化祭ではクラスメイトに指示を出せた。
4	女	期限が迫ってきたこと	長所：割と真面目です。 短所:自分の意見をあまり言えない。	私は地味にやることが得意なので、同じ係の人と協力して頑張ります。	私は前向きなので、文化祭では居残りをするなど積極的に参加しました。
5	女	－（担任による抽出）自分の役割分担が決まったこと	長所:人の話を聞くのが得意、優しくできる。 短所：イライラしがち	人の話を聞くのが得意なので、クラスのみんなをまとめられるようにしたい。頑張ってイメージして具体的なものにします。	私は周りの人と協力できるので、文化祭では全体をまとめる仕事をしました。

図表 6「Ｂ高校の自由記述の変化」

ウ　教師の指導の影響

Ｂ高校は１年次のみ二人ホームルーム担任制をとっているため、２名の役割分担による差がある項目も多く、ホームルーム担任独自の指導の特徴とその影響を挙げることは難しかった。活動の進捗状況を把握していた時期については、文化祭前１か月の時期から、80%以上の

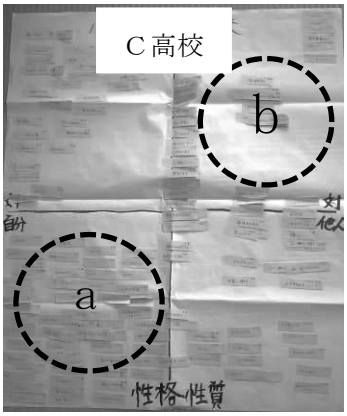
ホームルーム担任が把握していたと回答している。この時期から、活動が本格化し、ホームルーム担任の介入が行われることが多いと考えられる。特にこの時期行った指導として肯定的回答が多かった項目は、「リーダーへの指導・助言」で、生徒個人への声掛けや助言を行っていることが分かる。教師が生徒の自主性を尊重しつつ協働する活動を行わせるために、全体指導よりも生徒個々の役割や活動を把握し、適宜声掛けをしていくことを重視している教師が多かった。

(3)　C高校

ア　単純集計

事前・事後ワークシートを比較すると、項目Aで肯定的回答（あてはまる・ややあてはまる）をした割合は 71.7%から 75.9%に 4.2%上がった。また、項目Cでは 42.9%から 51.7%に 8.8%上がり、項目Dでは 56.6%から 59.3%に 2.7%上がった。一方、項目Bでは 77.1%から 77.9%に 0.8%とあまり上がらなかった。

事前ワークシートで肯定的回答の割合が高いのは項目Aと項目Bであり、低いのは項目Cと項目Dであった。文化祭前も後も、「クラスは協力して活動できている」、「クラスの一員であるという自覚をもっている」と意識している生徒は多く、「クラスは協力して活動できている」と意識している生徒はより増えた。



図表７「C高校の４領域のプロット図」

イ　自由記述の分析

C高校では、ポジティブな表現もネガティブな表現も「明るい」や「短気」などの自分の性格や性質について多く書かれていた（図表７のａ部分）。一方で、他人に対する能力に対する表現はあまり種類がなかった（図表７のｂ部分）。ただし、「協力して行動できる」と答えた生徒は多く、「協力」ということについて意識している生徒は文化祭前から多いことが分かった。

項目Gの中で多かったものについて調べると、１番が「友達の協力」の 20.0%で、２番目は「きっかけはなかった」の 12.2%であった。ここでも「協力」というキーワードが現れていた。生徒 No.1（図表８）は、短所に「コミュニケーションがとれない」と事前ワークシートに書いたが、事後ワークシートの bqs5 で「知らない人の前での見世物にチャレンジして、文化祭で少しは人の前で発言することができました」と書いていた。生徒 No.2 は、長所を生かして自分の役割を果たした。aqs3 で「休みの時間なのに手伝ってくれた」、「アイディアに困ったときに、提案してくれた」などの「友達の協力」がどちらの生徒にもあった。それに加えて、他者から認めてもらうことや必要とされることがやる気となっていた。項目Gで「きっかけはなかった」と答えた生徒は、「特になし」と消極的な回答が多かった。一部に、生徒 No.4 のように自分の長所を生かして自分の役割を果たした生徒もいた。しかし、項目Gで「友達の協力」と答えた生徒に比べると、他者から認めてもらえていると感じている生徒が少なかった。

これらの結果を踏まえると、C高校では、生徒一人一人に役割を意識させ、他者と協働し

て活動できる機会をより与える必要があると考えられる。ただし、生徒によっては他者と協働しての活動が苦手なこともあるので、その生徒に合わせた協働の場を用意する必要がある。

以上のことを項目Ｈと項目Ｊのキーワード数の変化を調べ、数値的に置き換えて分析する。項目Ｈにおける文の数は 827 で、語句で最も多く使用されたものは「人（出現回数 83 のうち、長所として 35、短所として 48)」で、2 番目が「自分（出現回数 71 のうち、長所として 17、短所として 54)」、3 番目が「意見（出現回数のうち 46、長所として 12、短所として 34)」であった。ただし、「人」に関しては、「人見知り（出現回数 22 のうち、長所として 3、短所として 19)」、「人前（出現回数 7 のうち、長所として 3、短所として 4)」、「他人（出現回数 5 のうち、長所として 3、短所として 2)」のように様々な使われ方をしていた。「人」、「自分」、「意見」のいずれも短所として使われる方が多かった。次に、特徴があった二つの語句は「行動（出現回数 38 のうち、長所として 15、短所として 23)」と「協力（出現回数 28 のうち、長所として 26、短所として 2)」であった。「行動」では、長所としての「他人と協力して行動できる（出現回数 11 のうち、長所として 11)」と短所としての「自分から行動できない（出現回数 14 のうち、短所として 14)」の主に二つの使い方に分かれ、「協力」では、長所としての使われ方がとても多かった。以上のことから、文化祭前から「自分」や「協力」に意識している生徒が多かったといえ、この結果は、４領域へのプロット図と同じ結果となった。

項目Ｊにおける文の数は 529 で、語句で最も多く使用されたものは「協力（出現回数 39 のうち、長所として 39)」、2 番目が「人（出現回数 30 のうち、長所として 13、短所として 2)」、3 番目が「行動（出現回数 25 のうち、長所として 17、短所として 3)」であった。また、「行動」では「他人と協力して行動できた（出現回数 13 のうち、長所として 13)」のように他者との協働ができたと答えたものが一番多かった。

No.	性	項目Ｇ	項目Ｈ	項目Ｉ	項目Ｊ
1	男	友達の協力	長所：諦めない 短所：人とのコミュニケーションがとれない	人との会話はあまり得意ではないので、文化祭ではお客さんとマジックなどあまり人にふれないことをする。	私は、マジックを見せる役なので、文化祭ではお客さんの前で精一杯力を出し切ることができました。
2	女	友達の協力	長所：みんなに意見を聞いてみんなをまとめる 短所：飽きやすい	実行委員としてみんなをまとめていく。	私は、実行委員として、みんなを引っ張ることが役割でした。大変でしたが、頼ってもらえたので、引っ張ることができました。
3	男	きっかけはなかった	長所：気遣いができる 短所：すぐ飽きる	とりあえず、邪魔にならないようにする。	貼り付け担当で貼り付けをしました。
4	女	きっかけはなかった	長所：絵が得意、慣れれば積極的に話し掛ける 短所：自分から話し掛けられない。集合が苦手	私は絵を描くのが好きなので、文化祭では教室の装飾をします。	絵を描くのが好きなので、文化祭では黒板に絵を描いた。
5	女	－（担任による抽出） いいものを作りたい	長所：一度決めたら最後までやる 短所：諦めてしまうことがある	私は文化祭実行委員なので、文化祭では皆をまとめます。	私はブラックボックス担当なので、文化祭ではお客さんを相手に喜んでもらえるようにした。

図表 8「Ｃ高校の自由記述の変化」

ウ　教師の指導の影響

教師アンケートでは、ほとんどの項目で 80%以上のホームルーム担任が肯定的回答をしていた。また、進捗状況を把握していた時期については、２か月以上前の時期から、ホームルーム担任の 70%が把握していたと回答し、1 か月前にはホームルーム担任の 90%が把握していたと回答した。早めの時期から、進捗状況を把握するホームルーム担任が多く、ホームルームや委員、係に対する指導や助言も早い時期から行っていた。指導で心掛けていることについては、「同じ方向で取り組むことが大切。そのために、生徒がお互いにコミュニケーションをとることが必要」、「できたことに対して褒め、その後反省点や課題を考えさせた」などの意見が多かった。

以上の結果から、自分から行動できない生徒や、人見知りなど他者との関わりが苦手な生徒が多いことがわかった。そのため、そのような生徒が自身の役割を意識し他者と活動できるように、ホームルーム担任が早い時期から進捗状況の確認をしたり、指導や助言を行ったりしたと考えられる。そして、生徒が自信をもつように、ホームルーム担任が積極的に生徒を褒め、生徒が自分自身で考え行動できるように、反省点や課題を考えさせたのだと考える。

(4)　Ｄ高校

Ｄ高校は、併設型中高一貫教育校であり、適性検査を受検して中学校から入学する生徒（以下、中入生と略記（３クラス 120 名））と、推薦に基づく選抜・学力に基づく選抜によって高校から入学する生徒（以下、高入生と略記（２クラス 80 名））がいる。Ｄ高校における１年のクラス編成は、教育課程上、中入生クラスと高入生クラスは分けられている。

そこで本研究では、全体の傾向を分析するだけでなく、中入生と高入生の違いにも焦点をあてるため、事前・事後ワークシートの実施クラスを分けた（実施クラス１～３組、未実施クラス４～５組）。中入生と高入生の違いが、記述量の違いに影響を与えるのかを分析の観点に入れるためである。

ア　単純集計／クロス集計

項目Ａにおいては、肯定的回答が、77.3%から 84.0%に上昇していた（中入生）。これは、高入生でも同様の上昇がみられた（＋29.7%）。また、所属するホームルームに対する居場所（居心地の良さ）に関係する項目Ｃにおいても、生徒が試行錯誤しながら自身の長所をより生かしていこうという意思がこの数値の上昇をもたらしたといえる（中入生：＋7%、高入生：＋3.2%）。この結果は、自由記述において、使う語彙がより具体的になったことからも生徒のホームルームに対する意識の変化がみてとれる。いずれの単純集計の結果も、事前より事後の方が肯定的回答の数値は上昇し、特別活動が生徒の人間関係を構築する上での一種の装置になっているといえる。

一方で、項目Ｇについては、中入生、高入生で顕著な差が表れた。きっかけの一番としたものは、中入生は「もともとやる気」（17.2%）、「いいものを作りたい」（12.7%）、「自分の役割が決まったこと」（12.7%）、高入生は「友達の協力」（20.0%）、「クラスの雰囲気」（16.3%）であった。この背景を捉えると、学校の雰囲気やクラスの雰囲気は、学年進行とともに経験として蓄えられ、その反省点が次の年度の活動に生きており、よりよいものを作ろうという

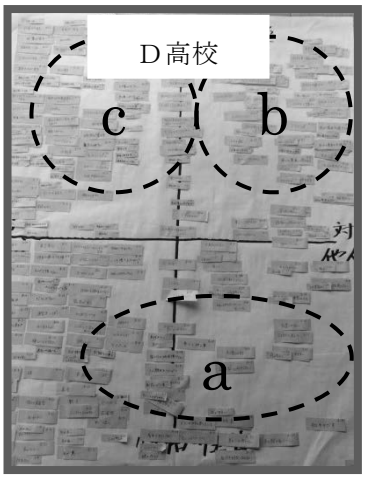
意識が強くなるといえる。中入生にとっては、中学３年間は「学習発表」としての位置付けの文化祭が、高校生になり、自分達の手で中身を創造することができる「祭り」としての位置付けに変わっても、文化祭というもの自体に対してやる気があり、自分自身の役割が明確化されることでその意欲がさらに高められたといえる。一方で高入生は、ホームルームごとに団結していこうとする意識が強い傾向にあった。また、友達の協力をきっかけに挙げていることが多く、高校に入って経験する初めての文化祭に、前向きに取り組む姿勢が見て取れた。異なる中学校で学んできたホームルームの仲間が、力を合わせてクラスの雰囲気を作っていこうとする姿勢は、準備期間における教師の観察からも明らかであった。

事中に行った振り返りグラフの作成は、活動に影響を与えたものには入らず（0.0%）、役割を振り返ることよりも目の前の作業を優先させる生徒が多く、効果は見られなかった(0.0%)。なお、この項目における他校の回答は、少ないものの、0%ではなかった。生徒の作業の様子に介入する時期に合わせて実施したり、仲間内で滞っている様子が見られたりするときに実施すると効果が現れたかもしれない。

なお、クロス集計では、文化祭での役割がクラスへの意識にどのように影響を与えるのかをみるため、二つの項目で分析をした。まず、「文化祭で自分の役割を意識して活動できた（aq5)」と「このクラスの一員であるという自覚をもっている（aq2)」の結果は、統計学的帰無仮説検定を行った結果、中入生は統計的に有意であるといえ、役割があることでクラスの一員であるという自覚が高まるということができる（p 値は $p=0.001<0.05$（中入生）、$p=0.001<0.05$（高入生）であり、有意水準 5%より小さいので有意差ありと判断。なお p 値とは統計学において検出された変化が偶然起こる確率を示す値である)。また、「文化祭で自分の役割を意識して活動できた（aq5)」と「人と協力して何かを行うことが得意である（aq4)」の結果についても、中入生・高入生ともに統計的に有意であるといえ、役割を意識して活動できることで、人と協力して行動することに対する肯定感が高まるといえる（$p=0.002<0.05$（中入生)、$p=0.021<0.05$（高入生))。

イ　自由記述の分析

Ｄ高校における４領域に示したプロット図では、図表９の a 部分に水色の付箋が集中した。この領域は「性格・性質」軸であり、自分自身にあまり自信がもてないという傾向が表れた。一方で、「対他人軸」である図表９の b 部分は、リーダー経験が他校と比べて多い（Ｄ高校 68.1%、他校平均 44.7%）ことからも、他人との調整に自信がある者とそうでない者が混在しているということが分かる。これは、自由記述に使われている語句にも他者との関わりに自信をもっているものは少なく、友達との仲を配慮しながら書いている部分が多かった（例えば、「私は班長ではなかったのですが、周りを見てみんなに指示を出し、リーダーとして頑張りました」や、「クラスの周りに目を配り、片付けなどを積極的に行うことができた」)。一方で、自分自身の能力（図表９の c 部分）については、肯定的に捉えている生徒が多く、自分自身の自慢できるところを



図表 9「Ｄ高校の４領域のプロット図」

多く書いていた。このことから、個人の能力に対する自信はあるものの、それを発揮できる場面が少なく、他者との関係の中で生かせる環境作りがあまりできていないといえる。

事後ワークシートの自由記述の変化について、項目Gを比較した（図表 10)。性別による分類はしているが、記述量や使用語句に顕著な違いはなかった。事前の記述では長所・短所を多く挙げている生徒（生徒No.1）はいたが、事後の記述においては、事前に書いた長所が直接的な言葉にはなっていなくても、自分の長所をもとに、自分なりの役割を果たせたと実感し記述していた。事前ワークシートでは、自分自身の事柄に目をむけた記述が多かったが、事後には、他者と協働できたことが書かれている（生徒No.2、生徒No.3)。

No.	性	中入生 高入生	項目G	項目H	項目I	項目J
1	男	高入生	友達の協力	長所：理解するのが好き、工夫を考える、コンピュータについてある程度は真面目、優しい、人の役に立ちたがる 短所：細かいことにつっこむ、すぐ調子にのる、計算は苦手、おせっかい、人前で面白いことを言ったりできない	工夫することが好きなので仕掛けの仕組みを考える。	私はいろんなことができるので人の手伝いをしました。
2	女	高入生	友達の協力	長所：ポジティブ 短所：思ったことを言ってしまいがち	前に立って話すことは苦手ではないので、みんなの中心になって意見を出したり指示をしていきたい。	私は班長ではなかったのですが、周りを見てみんなに指示を出し、リーダーとして頑張りました。
3	男	中入生	もともとやる気	長所：力持ち、気持ちを考える 短所：雑、色々と他人事	ものを運ぶ。	周りを見ることを意識していたので、人手が足りないところや不足した部分を作った。
4	女	中入生	もともとやる気	長所：リーダーとなってみんなをまとめることができる。 短所：自分の意見を通そうとしすぎる。	中心となることが多いので、製作に入る前の話し合いでみんなの意見をまとめていきたいと思う。	私は全体を見て仕切れるので、前日準備でみんなをまとめた。装飾を協力してやった。
5	男	高入生	自分の役割分担が決まったこと （担任による抽出）	長所：ポジティブ 短所：楽観的すぎ	私はクラス文実なので、文化祭ではクラスのために頑張ります。	―
6	女	中入生	いいものを作りたい （担任による抽出）	長所：単純な作業も集中して続けられる 短所：人に仕事を任せるのが苦手	全体の統率はしつつ、要所要所の仕事を各方面にきちんと割り振る。	私は受付系が得意なので、文化祭ではシフト以外のときもクラスに入って活動しました。

図表 10「D高校の自由記述の変化」

使用語句の出現数の変化については、項目Ｈで最も使用されていた語句の数を二つの方法で検証し、項目Ｊにおいて、事前ワークシートで多く使用された語句が、事後でどの程度使用されているかについて分析を行った。

一点目の検証方法は、４領域のプロット図である（図表９）。この中で最も多かったキーワードは、長所が「協力して行動できる（25 名）」、短所が「意見をうまく言えない（19 名）」であった。項目Ｊの分析でも、「協力」（28 名）と「行動」（25 名）を多く使用していた。

二点目の検証方法は、テキスト型データの統計的分析ソフトウエアを使用するものである。項目Ｈにおける文の数は 405 で、高校生の長所に用いられていた語句で最も多かったものが、「行動（出現回数 33 のうち、長所として 22、短所として 11）」、「意見（出現回数 31 のうち、長所として 10、短所として 21）」、「人」を含む語は出現回数 51（うち「人」は長所として 16、短所として 14、「人前」は長所として 2、短所として 9、「他人」は長所として 6、短所として 4）であった。項目Ｊにおける文の数は 471 で、長所に用いられていた語句で最も多かったものが、「協力（出現回数 38 のうち、長所として 37、短所として 1）」、「行動（出現回数 27 のうち、長所として 27）」であった。

この二つの検証から、事後ワークシートでの記述は、「協力」し「行動」できた生徒が多かったことが裏付けられた。４領域に分けた調査者の主観が入ってしまう可能性がある分析を、数値的な分析に置き換えることで、データの信頼性が確保された。

ウ　教師の指導の影響

教師と生徒の関わりを明らかにするために実施した教師アンケートでは、「最も活躍していた生徒」が必ずしも事後ワークシートで文章が書けているわけではなかった（図表 10、生徒 No.5）。教師アンケートから指導の在り方を考えると、関与するか、介入しないか、生徒に対してどのように関わるかという問題がある。この関わり方を見るために、「各作業の進捗状況の把握をしていたか」について、時期とその度合いについて調査した。その結果、全てのホームルーム担任が、文化祭の２か月前から生徒の作業進捗を把握し、ホームルーム全体と生徒一人一人、個別に声を掛けていた（回答の全てが肯定的回答）。また、事前ワークシートを実施した生徒（１～３組）は実施していない生徒に比べて、事後にはより多くの語句を使用して記述していた。文化祭の前に自分自身の役割を認識して活動した生徒は、より自分自身の長所を生かしながら活動に加わることができた。事後のワークシートでは、自分自身と他者との協働の場面を振り返り、言語化することができた。そして、ホームルーム担任が生徒にかけた言葉が多いと、生徒の使用語句も多い傾向が見られた（図表 11）。

	文化祭終了後の担任の声掛け	使用語句数の変化
中入１組	賞をとれなかったが、映画の内容はよかった。アニメは見終わったなり涙を流している人が多くいて、観客の心を打った。笑わせるより、泣かせる出し物は高度さを必要とする。レベルの高いことを達成できたと自信をもってよい。	項目Ｊ　（680（238））
高入３組	クラスや部活動を通じて自主的に行動する姿を見て、うれしかったこと。ようやく本校の生徒になったということ。困っている人を見て、助けられるかどうか、このような行事では、よく分かるし、人の信頼もそこに生まれること。	項目Ｊ　（503（166））
中入４組	来年は今年の反省を生かして頑張りましょう。	項目Ｊ（428（144））

図表 11「Ｄ高校のホームルーム担任の声掛けと項目Ｊのキーワード数」

以上より、自主的・自律的に活動することができる生徒であっても、活動の際に教師が積極的かつ具体的に声を掛け、褒め、見守る指導をすることによって、生徒が自分の活躍の場面を振り返るきっかけとなり、結果として所属するホームルームに対する意識も高くなるといえる。

3　分析と考察－４校間における語句の捉え方の変化－

校種や生徒の違いがあるため、一概に全ての学校を比較することはできないが、事前・事後ワークシートの中での語句の使用について、一定の傾向が見られた点を以下に述べる。

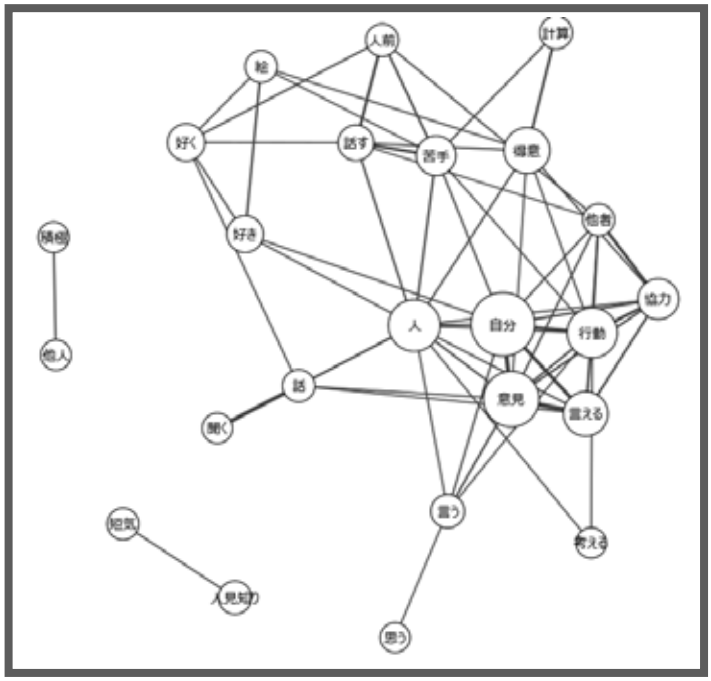
事前ワークシートにおける項目Ｈの長所・短所に関する記述（４領域のプロット図）では、「意見をうまく言えない」と回答した生徒が各校において多かった。その理由や背景は各校によるが、これは「高校生の生活と意識に関する調査報告書」（前述 平成 27 年）の「自分はだめな人間だと思うことがある」という項目に通じる結果であるといえる。また、テキスト型データの統計的分析ソフトウエアを使用し、項目Ｈの長所・短所について書かれた４校の記述量を分析した（1,814 文、総抽出単語数は 15,086 語）。出現回数が多いものから順に、出現回数 30 回以上のものを図表 12 に示す。

ここで使用されている語句の第１位の「自分」は出現回数 177 のうち、120 が短所として用いられていた。また、「意見」は出現回数 140 のうち、99 が短所として用いられていた。また、「自分」と「意見」は同じ文章内で使用されていることが多く、「自分の意見を言えない・伝えられない」としている生徒が多くいた。

抽出語	出現回数
自分	177
意見	140
人	122
行動	115
得意	95
言える	88
協力	71
苦手	66
好く	55
明るい	53
好き	52
話す	48
言う	38
人見知り	35
計算	34
人前	33
話	32
絵	31
声	30
他者	30

図表 12「４校の事前ワークシートの出現回数の多かったキーワード」

「他人」や「人前」などの「人」を含む表現は 252 回使用されていた。いずれも、ネガティブな使用が多く、「人見知り」や「人前で話すことが苦手」、「他人と協力できない」などがあった。この「人」に関する記述が多いことは、ソフトウエアのツールを使用して共起ネットワークを作成したことからも明らかになった（図表 13）。共起ネットワークとは、内容分析（content analysis）において、語がどのように結び付いていたのかを表現する方法である。



図表 13「事前ワークシートの長所・短所の共起ネットワーク」

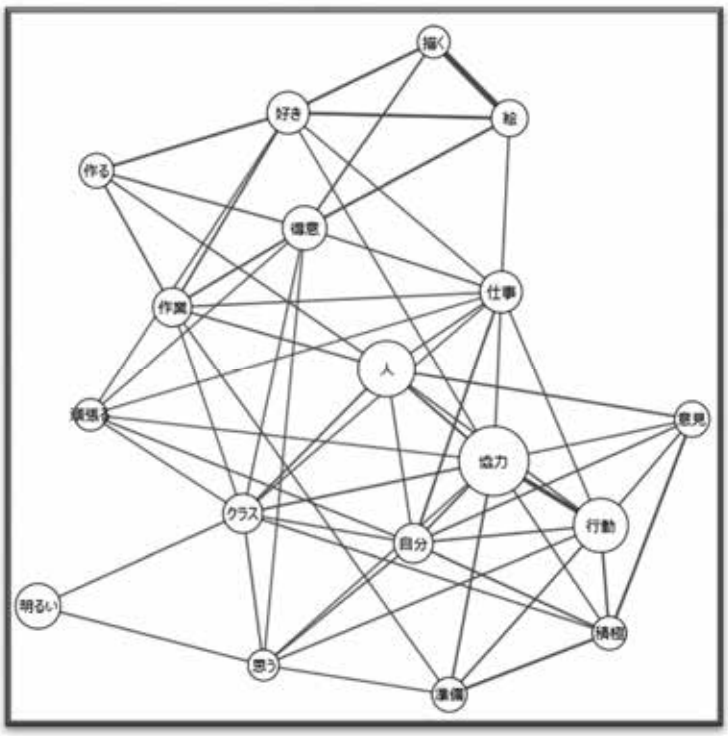
使用した語句の出現回数が事後ワークシートではどのように変化したのかを考察する。各校の分析の中には、事後の記述量が増したり、説明が詳細になっていたりして、特別活動におけるホームルーム内での協働が生徒の人間関係に影響を与えるという知見が得られた。

項目Dについては、ソフトウエアによるテキストマイニングの結果、1,182 文、総抽出単語数は 10,667 語が抽出された。事前ワークシートに比べて、「特にない」、「分からない」や無回答の生徒もいたため、４校全体としては使用語句の数が減ったものと考えられる。ここで使用されている第１位の「協力」は出現回数 98 のうち、全てが肯定的な意味で用いられており、事前ワークシートでは出現回数の多い語句が短所やネガティブな表現として用いられていた傾向から見ると、大きく変化した点である（図表 14)。また、事前ワークシートでの長所・短所で「人」を中心としていた共起ネットワークも、事後ワークシートにおいて中心となっていたのは、「協力」や「行動」という語句であり（図表 15)、「協力して行動できた」と書かれている部分が多く、かなり強い関係性を示していた。

事前ワークシートでも多く用いられていた「人」が使用されていた文脈について、生徒の記述をたどっていくと、「人見知り」という記述は３例あったが、事後ワークシートでは、「人見知りなので、裏方をやった」や「人見知りだけど、少し克服した」等、逆説的に使用しており、文化祭の前には短所だと思っていたことを、協働して活動することを通して捉え直している生徒がいることが分かった。事後ワークシートで、単に「人」という語句を使用した 72 例の記述についても、「人と協力できた」や「人を支える」、「人の話を聞いて行動した」等、ポジティブな文脈で使用している文章が多く、事前ワークシートでの語句の使い方とは大きく異なっていた。

抽出語	出現回数
協力	98
人	72
行動	67
明るい	49
得意	47
好き	43
仕事	42
クラス	37
自分	37
作業	36
絵	32
意見	30
準備	28
作る	27
特に	27
積極	26
頑張る	23
描く	23
思う	21

図表 14「４校の事後ワークシートの出現回数の多かったキーワード」



図表 15「事後ワークシートの共起ネットワーク」

4　まとめ

これらの分析・考察から、文化祭という特別活動においては、ホームルームの中で役割を認識し、協働的な活動をすることによって、生徒を大きく変容させたといえる。集団の中で自身の役割に気付いて果たそうとする力（思考力）は、他者に認められることによって、より一人一人の自己肯定感・自己有用感を高めることにつながった。ホームルームという集団で団結して、一つのものを完成させようと話し合うとき、他者との関わりが苦手であると短所として認識していても、ホームルームという集団の中の人間関係が形成されていくことによって、徐々にコミュニケーションが取れるようになっていた（基礎力）。そして、互いを高め合おうとする姿勢（実践力）を身に付けることができるようになっていた。つまり、仮説で設定した「役割を自覚し、協働し、承認されることで自己肯定感・自己有用感が高まる」ということについてはおおむね立証できた。ただし、主体的に活動できるか否かには個人差があった。

以上より、本研究では特別活動において、生徒が思考力・基礎力・実践力を高めるために、教師が果たすべき役割について、次の三点としてまとめた。

一点目は、生徒が主体的に活動できるような役割を作ることである。意図的・計画的に生徒に役割を与えることにより、生徒の長所・短所（生徒の特性）を集団の中で生かしコミュニケーション能力を発揮することが可能になる。

二点目は、人間関係形成の場を作ることである。集団として活動する前に、高校入学以前の経験の把握や、所属する高校の特性に合わせて、生徒一人一人に人間関係形成の場をできるだけ小さな単位で、なるべく多くの機会を作ることが必要である。

三点目は、教師が支援的な立場で生徒を見守ることである。これは、教師主導ではなく、生徒が主体的に創り上げる特別活動（文化祭）に、教師は生徒の活動の進捗を把握しながら、必要なとき支援や指導をすることで、生徒同士が互助することが可能となる。

Ⅶ　今後の課題

以上のような分析と考察を踏まえ、今後の更なる課題は、生徒の活動に対する、教師側の指導のタイミングと内容の検証である。また、教師の声掛けのタイミングや指導を研究することで、生徒が主体的な活動に変化することになり、ホームルーム内の人間関係にどのような作用をもたらすのかを明らかにすることができると考える。また、今回の実践事例は、各校で実践しやすいショートエクササイズを導入したが、今後、一単位時間のホームルーム内で行った場合、どのような指導の在り方が考えられるかという点について、改めて検証が必要である。

このアンケートは、東京都教育研究員（特別活動部会）の研究で使用するものです。文化祭前・後のアンケートを通して皆さんの成長を客観的に分析するために使用します。ありのままを答えてください。ご協力をお願いします。

平成 27 年度（特別活動）
文化祭に関するアンケート〔事前〕

実施日；平成 27 年　　月　　日
東京都立　　高等学校
高校 1 年　　組　　番

1.文化祭でのクラスの出し物、私の役割

クラスの出し物；＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

私の役割・担当（決まっていれば）；＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2.あなたのことについて、当てはまる数字に○をつけてください。

あてはまる（ある）　あてはまらない（ない）
例【4－③－2－1】

(1) 今まで「○○長」とつくようなリーダーを経験したことがある。【4(ある)－1(ない)】
(2) 人前(10 人以上)に立って話をすることは緊張する。【4－3－2－1】
(3) クラスは協力して活動できている。【4－3－2－1】
(4) このクラスの一員であるという自覚をもっている。【4－3－2－1】
(5) このクラスは、自分の良いところ(長所)をわかってくれていると思う。【4－3－2－1】
(6) 人と協力して何かを行うことが得意である。【4－3－2－1】
(7) 文化祭をぜひ成功させたいと思っている。【4－3－2－1】

3.あなたの長所や短所は何ですか。

例：長所…・他者と協力して行動できる　・計算が得意　・料理が好き
　　短所…・自分の意見をあまり言えない　・自分から行動ができない

4.長所・短所をふまえて、あなたが文化祭の役割としてクラスにできることは何ですか。

例：人の話を聞くことが得意なので、クラスの人と話し合って、焼きそばの材料や調理方法を決める。
例：私は＿＿＿＿＿＿なので、文化祭では＿＿＿＿＿＿＿＿します(できます)。

5.私は文化祭で「○○○」をやります（目標の宣言）！

例：装飾がうまくいくように、班長を助ける！

※「クラスの人に言われてうれしかったこと」「クラスの人に助けてもらったこと」を事後アンケートで書いてもらいます。他の人の活躍に気づいたら、自分から声をかけましょう。

ご協力ありがとうございました。

このアンケートは、東京都教育研究員（特別活動部会）の研究で使用するものです。文化祭前・後のアンケートを通して皆さんの成長を客観的に分析するために使用します。ありのままを答えてください。ご協力をお願いします。

平成 27 年度（特別活動）
文化祭に関するアンケート〔事後〕

実施日；平成 27 年　　月　　日
東京都立　　高等学校
高校 1 年　　組　　番

1.文化祭を終えて、当てはまる数字に○をつけてください。

あてはまる　あてはまらない
例【4－③－2－1】

(1) クラスは協力して活動できていた。【4－3－2－1】
(2) このクラスの一員であるという自覚をもっている。(文化祭を通して、自覚を持てるようになったと思う。)【4－3－2－1】
(3) このクラスは、自分の良いところ(長所)をわかってくれていると思う。(文化祭を通して、わかってくれるようになったと思う。)【4－3－2－1】
(4) 人と協力して何かを行うことが得意である（得意になった)。【4－3－2－1】
(5) 文化祭で自分の役割を意識して活動できた。【4(できた)－1(できない)】
(6) 振り返りグラフの作成によって、文化祭準備を振り返ることができた。【4－3－2－1】
(7) 文化祭（クラスの出し物）は成功した。【4－3－2－1】
(8) 私はクラスの中で存在感があると思う。【4－3－2－1】
(9) 自分のクラスは仲のよいクラスだと思う。【4－3－2－1】
(10) 在籍している学校に満足している。【4－3－2－1】

2.あなたが文化祭に対してやる気になったきっかけすべて選び、○をつけてください。その中で、一番のものの記号を右の＿＿に書いてください。

1番のものは

（1）自分の役割分担が決まったこと　（2）夏休み等の登校　（3）振り返りグラフの作成
（4）担任からの指導・助言　（5）担任以外の教員からの指導・助言　（6）先輩からのアドバイス
（7）友達の協力　（8）友達からの励まし　（9）友達からの感謝の言葉
（10）委員やリーダーの頑張りを見て　（11）クラスの雰囲気　（12）学校の雰囲気
（13）いいものを作りたい　（14）クラス内での話し合い
（15）強制されたこと　（16）期限が迫ってきたこと　（17）もともとやる気　（18）怒られたこと
（19）周りに流されて　（20）何をしても変わらなかった　（21）きっかけはなかった
（22）その他（　　）

3.友達から言われてうれしかったこと、助けてもらったことを書きましょう。

4.「良いところ」を生かして、クラスにどのような役割を果たすことができましたか。

「良さ」の例：協力して行動できる、明るい、意見を言える、人の話を聞ける、前向き
文章例：私は＿＿＿＿＿＿なので、文化祭では＿＿＿＿＿＿＿＿しました(できました)。

5.「新しいこと」にチャレンジして、クラスにどのような役割を果たすことができましたか。

文章例：私は＿＿＿＿にチャレンジして、文化祭では＿＿＿＿＿＿しました(できました)。

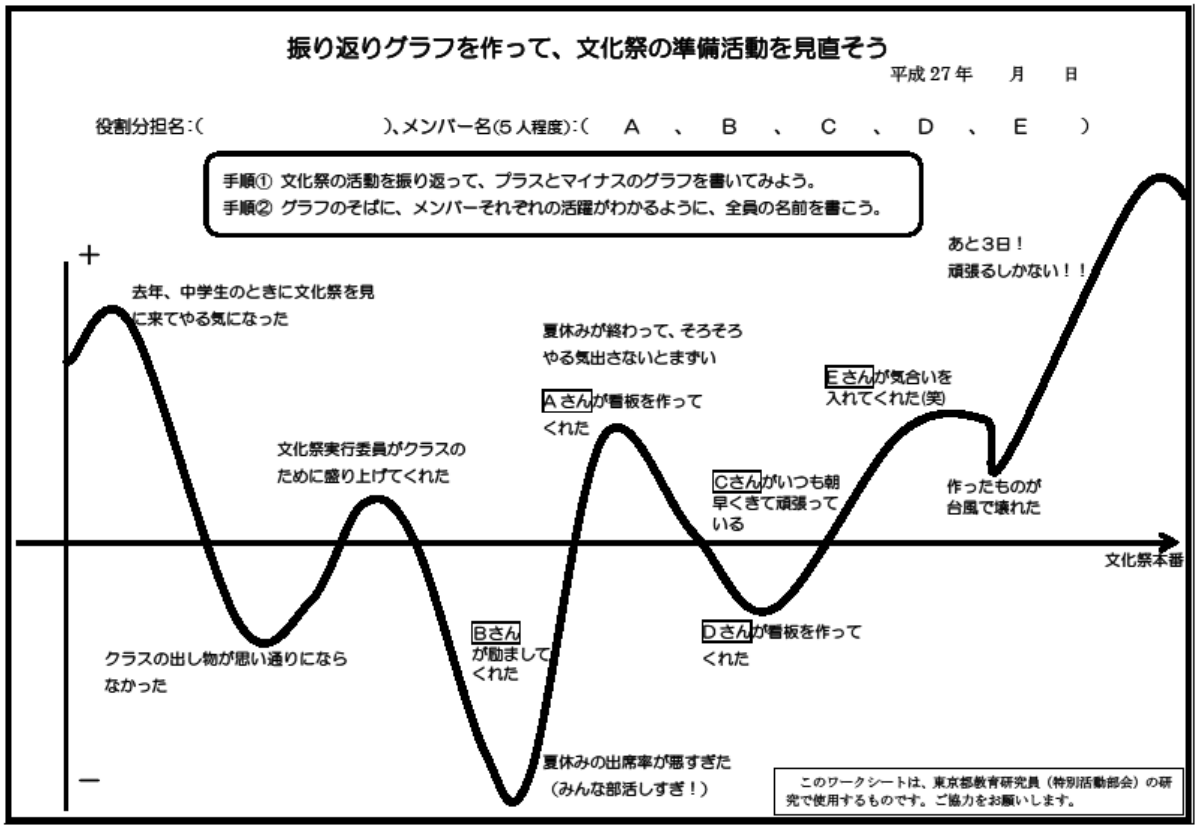
6.今回の文化祭でうまくいかなかったことと、その理由を書いてください。

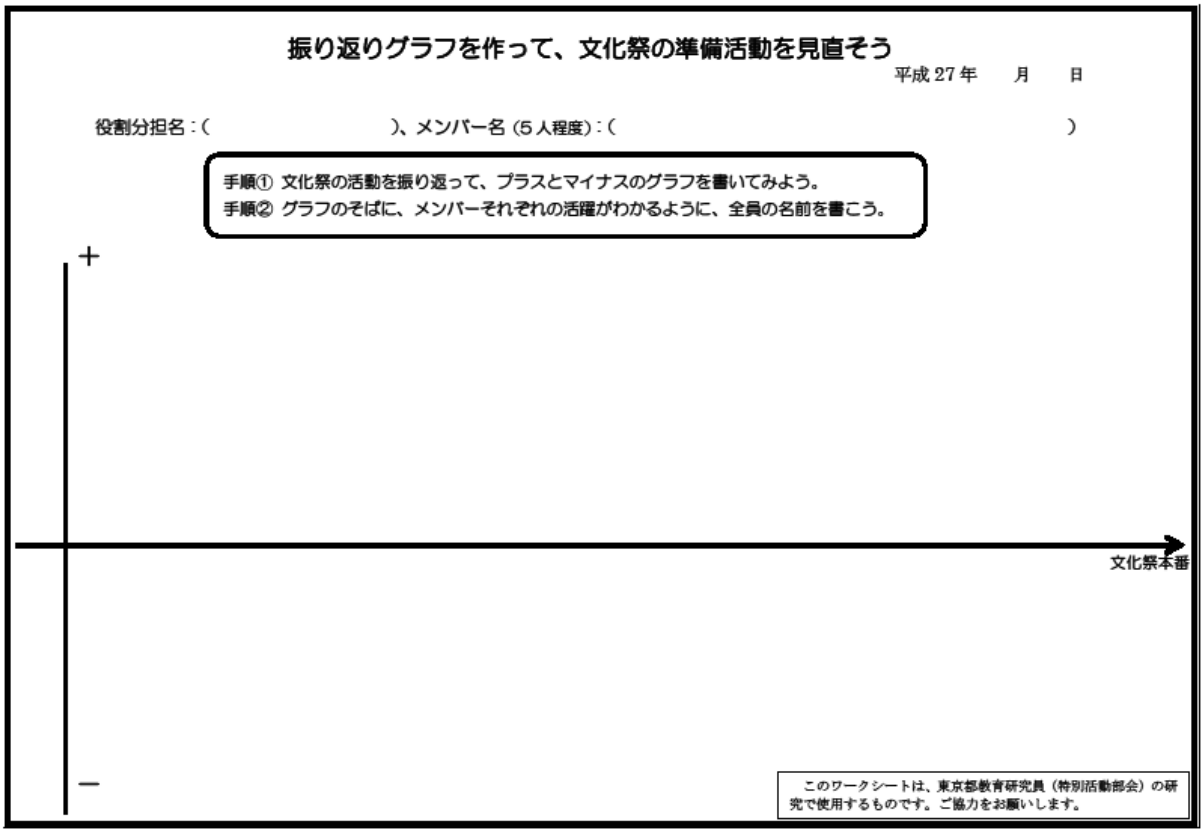
≪うまくいかなかったこと≫＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

≪その理由≫＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご協力ありがとうございました。

2　振り返りグラフ（見本・生徒用）





3　教師アンケート

平成 27 年度（特別活動）
文化祭に関するアンケート〔担任の指導〕

実施日：平成 27 年　　月　　日
東京都立　　高等学校 1 年　　組担任

今まで、東京都教育研究員（特別活動部会）の研究で使用するアンケート・ワークシートの実施にご協力いただき、本当にありがとうございました。現在、その集計作業を進めているところですが、今年度は、教師の指導や助言が生徒にどのような影響を与えるかについても、生徒の回答と関連させて見ていきたいと思っております（学校種によって生徒との関わり方にも違いがあり、担任の指導がとても必要な学校と、生徒が自主的にやっていくので見守る指導をする学校等を明らかにするものです）。
そこで、お忙しいところ大変恐縮ですが、以下のアンケートにご協力いただきたく、どうぞよろしくお願いいたします。

1. 文化祭について、当てはまるものに○をつけてください。　　あてはまる　あてはまらない　**例【4－3－2－1】**

(1) クラスに対して、文化祭の意義や目的を説明したか。　【4－3－2－1】　いつ頃（　　）
(2) クラスのテーマ（出し物）決めに対する助言・指導をしたか。　【4－3－2－1】　いつ頃（　　）
(3) クラスの文化祭実行委員への指導・助言をしたか。　【4－3－2－1】　いつ頃（　　）
(4) クラスの役割分担決めの指導・助言をしたか。　【4－3－2－1】　いつ頃（　　）
(5) 各係のリーダーへ指導・助言をしたか。　【4－3－2－1】　いつ頃（　　）
(6) 参加意識の低い生徒へ指導・助言をしたか。　【4－3－2－1】　いつ頃（　　）
(7) 各作業の進捗状況の把握をしていたか。　　把握していた　把握していなかった（する必要がなかった）　**例【4－3－2－1】**

① 2カ月以上前から	【4－3－2－1】	② 2カ月前	【4－3－2－1】
③ 1カ月前	【4－3－2－1】	④ 1週間前	【4－3－2－1】
⑤ 3日前	【4－3－2－1】	⑥ 前日	【4－3－2－1】
⑦ 当日	【4－3－2－1】		

(8) 生徒の活動・活躍を褒めましたか。
① クラス全体に　【4－3－2－1】　② 生徒一人一人に　【4－3－2－1】
(9) 担任からみた一番頑張っていたと思う生徒の出席番号をご記入ください。

2. 文化祭後のホームルーム（SHR／LHR）で生徒たちにどのような話をしましたか。

3. 今回の調査に対するご意見・ご感想（時期や方法など）、ホームルームの指導で日ごろから意識してご指導されていることなど、ご教示いただきたくお願いいたします。

長い間にわたるご協力、本当にありがとうございました。

平成２７年度　教育研究員名簿

高　等　学　校　・　特　別　活　動

学　校　名	課程	職名	氏名
東京都立武蔵高等学校	全日制	教　　諭	◎峯岸　久枝
東京都立八王子拓真高等学校	定時制	教　　諭	○佐藤　雄一
東京都立大江戸高等学校	定時制	主任教諭	奈木いずみ
東京都立翔陽高等学校	全日制	教　　諭	池本　早織

◎　世話人　　○　副世話人

〔担当〕教育庁指導部高等学校教育指導課
課長代理　　杉谷　英樹

平成２７年度
教育研究員研究報告書

高等学校・特別活動

東京都教育委員会印刷物登録
（平成２７年度第１９７号
平成２８年３月）

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８４９
印刷会社　正和商事株式会社

リサイクル適性Ⓑ
この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。